

レトリックに着眼した「思考力」を育む単元開発の工夫

～レトリカルな随筆文の創作を通して子どもの「思考力」を育む～

上越市立大町小学校 尾矢 貞雄

1 はじめに

本稿は、子どもの「思考力」を育む単元開発について、レトリックの活用を視点にまとめたものである。学習指導要領では、『思考力』を「言語を手がかりとしながら論理的に思考する力」と定義している。本稿では、この定義に示される「論理」の解釈を「対象と対象とを関係付けること」とし、「思考力」を「言語を手がかりとして対象との関係をつかっていく力」と定義することとした。

2 レトリックと「思考力」

レトリックには様々な表現の方法があるが、その中でも直喩と隠喩に着目して、「思考力」との関連性を考えてみた。直喩は、一つの単語だけでは適切に表現しきれないときに使用する表現の仕方であるが、直喩には、単語と単語をつなぐ「類似点」が存在する。また、隠喩表現は、喩えであることを明示する言葉を使わず、別の言葉によって表現する方法であるが、隠喩には、「喩えるもの」と「喩えられるもの」との間に何らかの「共通点」が存在する。

「思考力」がはたらいているときは、異なる二つ以上の対象を、何らかの視点によって関係付けているときである。したがって、「思考力」をはたらかせるためには、対象同士を関係付けるための視点を持ち合わせていることが、その能力を発揮する条件となる。直喩や隠喩における「類似点」や「共通点」は、対象同士をつなぐ視点であり、これらの比喩表現を用いることはすなわち、対象同士を関係付けた結果（「思考力」がはたらいた結果）をとらえることができる。

以上のことから、レトリックにおける直喩と隠喩に焦点を当て、子どもの創作した作品を考察しながら、子どもの「思考力」のはたらきをとらえてみることにした。

3 「思考力」の育成に着目した実践の視点

本実践は、2年間にわたって、小学校第6学年の児童を対象として行った。子どもの「思考力」を育てるために、次のような手立てを用いて授業実践を行い、子どもの作品分析から「思考力」がどのようににはたらいていたかを考察した。

(1) 「読書単元」を「随筆文の創作単元」として位置付ける

随筆文やエッセイの多くはレトリカルで、読み手を作品の世界へと引き付ける。そこで本実践では、教材とする随筆文に学び、随筆文を創作する単元を開発することとした。教材として扱う作品は、読書単元として位置付く教材文『森へ』（光村図書）である。本教材は、作者のアラスカでの体験を巧みなレトリックによってリアルに表現している。本教材文には、直喩、隠喩をはじめ、擬人法、倒置法、擬音語、擬態語といった数多くのレトリックが効果的に活用されている。子どもは、本作品をレトリックという視点から読むことにより、そのレトリックのもつ楽しさやおもしろさを体感し、随筆文を創作する意欲を高めることだろう。

なお、本教材文はアラスカの自然や生き物の姿を、時間軸に沿って丁寧に描写しているため、文章量が多く、同じような随筆文を子どもがレトリックを活用して書くことは困難であると考えた。そこで、本教材文の冒頭の文章表現を模倣した随筆文の創作を構想した。本教材文の冒頭は、アラスカの大地を歩いて行く筆者が、あえてアラスカという地名を明かさずに、豊かなレトリックによってアラスカの大地を描写していく。この作品の冒頭に描写される文章の比喩を、子どもの随筆文の創作に取り入れるのである。

(2) 創作する随筆文のイメージをもたせる

子どもにとって初めての随筆文を書く体験となるので、随筆文の例を教師が創作し、子どもに紹介する。子どもが随筆文を創作する際には、随筆文のテーマを共通にし、そのテーマのもとで随筆文を書くようにする。また、テーマは、どの子どもも十分に体験しているものを選定する。

(3) 作品を交流し合い、評価し合う場を設定する

「作品の向こうに読み手がいる」ことを意識して創作活動に取り組むようにする。読み手がいるから、書き手の創作意欲が沸くのである。そこで、創作した随筆文を全員で読み合う時間を十分にとるようにする。そして、作品を読みながら「心を動かされた」「共感できる」「おもしろい」と感じた作品にシールを貼るようにし、互いの作品を評価し合うようにする。全員が作品を読み終えた時、シールの数が多かった作品を全体場で紹介することを、創作活動に入る前に子どもに伝える。

4 実践の実際

(1) 単元名：随筆文を書こう

(2) 教材名：『森へ』 光村図書6年上

(3) 単元の目標：○教材文をレトリックの視点から読み、レトリックの種類や使い方を知る。

○教材文から学んだレトリックを使って、身近な体験を随筆文に書く。

(4) 指導計画 全9時間

1次 教材文を読み、教材文のレトリックに学ぶ（4時間）

2次 自分が体験したことを、文章のレトリックを活用して文章表現する（3時間）

3次 互いの作品を読み合い、作品を評価し合う（2時間）

(5) 実践の実際

本教材文の中で認められるレトリックは、直喩・隠喩、擬人法、擬音語、擬態語、倒置法の5つである。教材文を範読し、子どもに感想を問いかけた。すると、「何だか、すごいリアルでした。」「今まで読んできた文章と、全然違う感じがしました。」と子どもは答えた。そして、続けて「なぜ、そのような感想をもったの。」と教師が尋ねると、子どもは様々な意見を述べた。以下に、子どもの意見を紹介する。

- ・「文の言葉の位置をわざと入れかえるから。」★
- ・「音を表す言葉を使っているから。」★
- ・「たとえを使っているから。」★
- ・「生き物でないのに、まるで意志をもって生きている人間のように表現しているから。」★
- ・「事実を物語チックに書いているから。」
- ・「独り言のような表現を使っているから。」
- ・「書き手の感情をむき出しにしているから。」
- ・「気配を漂わせる表現を使っているから。」
- ・「登場人物（動物）になりきった表現を使っているから。」★
- ・「一文は短く、句読点を上手に入れたリズムカルな表現を使っているから。」

★で示した意見は、まさにレトリックの効果に心を動かされた子どもの感想である。そこで、文章表現には、レトリックという修辞法があることを子どもに教えた。そして、レトリックによる文章表現の仕方を教材文から学んで、実際に文章を書いてみよう提案した。

まず、はじめに教材文に出てくるレトリックの種類を子どもに紹介した。（図1）そしてその後、レトリックが使われている箇所を教材文から見付ける活動を行った。レトリックを見付けたら、蛍光ペンでチェックするようにした。蛍光ペンでチェックし終えて改めて教材文を概観すると、どのページも蛍光ペンのチェックの後が残り、この教材文がレトリックによって巧みに仕上げられていることを、子どもたちは初めて知った。

教材文を読み込んだ後、レトリックを使って、実際に随筆文を書く活動を行った。はじめに、子どもに作品作りへのイメージをもたせるために、筆者が創作した随筆文を紹介した。作品のタイトルはあえて伏せておき、文章の内容から作品タイトルを想起させようと考えた。図2は、筆者が創作した随筆文（タイトル「お風呂」）である。

1 比喩(ひゆ)

(1) 直喩(ちよくゆ)

「まるで～のようだ」「～のようだ」という書き方で、事実と違った言葉で表現する方法

例) まるで、足で立っているように根が生え、その間に大きな穴が空いているのです。

(2) 隠喩(いんゆ)

「まるで～のようだ」「～のようだ」という書き方をせず、事実と違った言葉で表現する方法

例) ミルク色の世界

2 擬人法(ぎじんぽう)

人間ではないものを、あたかも人間の行動のように表現する方法

例) 森は、おいおいかぶさるようにせまっていました。

3 擬音語(ぎおんご)

人やものが発する音を、言葉で表したものを 例) 「ピロロロ」

4 擬態語(ぎたいご)

状態や感情など、音を発しないものを言葉で表現したもの

例) 白い太陽が、ぼうっと現れては、消えてゆきます。

5 倒置法(とうちほう)

通常の語順を変更させること→伝えたいことを強調することができる

例) 聞こえるのは、カヤックのオールが水を切る音だけです。

天井へとゆっくりと立ちのぼる、温かなきり。

きりの群れはとどまることを知らず、私の視界から様々な色を奪ってゆく。

やがて、私の視界から様々な色が消され、いつしか私は、その白いきりの中に包み込まれる。

私は、きりを生む透き通る緑の源の中に、ゆっくりと足を運び、

緑色の源は、疲れという荷物を抱えた私の身体に、静かにそして優しく語りかける。

「今日も一日、おつかれさま」

「ふう～～～」

私は、きりを生む源の中で、大きく息をはきながら、深く呼吸をする。きりは、私の身体に奥深くしみ込んでいき、

源は私の身体の内をじっくりと温めてゆく。やがて、私の額には汗がにじみ、その汗が頬をつたう。

その汗が身体からあふれ出し、私は、心地よい喉の湯さを感じる。

「ザッパーン、ザッ、ザッ」

私は勢いよくその源から立ち上がり、身体にまとわる緑を振り払う。

そうです、ここは私の心安らぐ場所「お風呂」です。

筆者の創作文は、プレゼンテーションソフトを使って、一行ずつゆっくり画面に表れるようにして行った。創作文に表現される言葉は、レトリックによって作られている。子どもは言葉を頼りに、何を表現しているのかを想像し始めた。

五文目を読み始めたころから、子どもたちがささやき始めた。タイトルが何であるかに気付き始めたからである。タイトルが

「お風呂」だと分かった子どもは、その答えを確かめるように、文に示される言葉から場面を想像する。文章をすべて読み終えるころには、多くの子どもがそのタイトルが「お風呂」であることに気が付いた。

随筆文の創作には3時間を使った。全員が随筆文を書き上げた後、みんなで作品を読み合った。作品を読んで、気に入った作品には、シールを貼るようにした。シールは、一つの作品に1枚貼ることとし、気に入った作品にはすべてシールを貼ってよいことにした。互いの作品を読み合う時間では、子どもたちは、それは楽しそうに作品に読みふけていた。以下にAさんの作品を紹介する。(作品左の数字は、行番号を示す。)

- 1 北極みたいな世界に、僕は入った。
- 2 さすがに厚着でも、氷のような空気には勝てない。
- 3 厚着を通り抜けて、ひんやり冷たい空気が肌に触れる。
- 4 僕は、小刻みにブルブルと震えた。
- 5 「助けてくれ」と言わんばかりに、「バサッ」と、フワフワな物に包み込まれに行っった。
- 6 しかし、世の中そんなに甘くはないと言わんばかりに、冷たい。
- 7 また、震えた。
- 8 耐えた。
- 9 僕は、耐え続けた。
- 10 そのせいか、天が微笑むように温くなった。
- 11 そして、僕はとてつもなく黄色い光を放つ月に照らされて眠りについた。
- 12 翌朝、お母さんの声が聞こえてきた。
- 13 「ん、いや、これは違うぞ」と心の中で思った。
- 14 「ジリリリリリ」
- 15 聞いていたのは、時計の音だった。
- 16 カーテンを開けると、闇の世界から抜け出せた、そんな気持ちになる。
- 17 そうです、ここは私のリラックスできる場所「ベッド」です。

5 考察

Aさんは、作品の中で2か所を直喩で、1か所を隠喩で表現した。まず、Aさんが用いた直喩について考察する。一つ目の直喩は、2行目の「氷のような空気」である。Aさんは、就寝時刻になってリビングを出て、自分の部屋に向かった。温かなリビングを出ると、冷たい空気に包まれAさんはブルブルと震えたのである。「空気」と「氷」は、「冷たさ」という点で類似している。ものの様子にかかわる類似点を、Aさんは直喩で表現した。

二つ目の直喩は、10行目の「天が微笑むように温かくなった。」である。この文には、主語が欠落している。文脈からすると、主語は「ベッドの布団」である。「天が微笑む」とは、「天気がよくなって温かくなる」という意味である。「ベッドの布団」と「天が微笑む」は、「温かさ」という点で類似している。ものの様子にかかわる「類似点」を、Aさんは直喩で表現したのである。

次に、作品中の隠喩について考察する。一つ目は、1行目の「北極みたいな世界」である。Aさんは、「リビングの外」を「北極みたいな世界」という言葉を使って隠喩によって表現した。Aさんは、北極へは行ったことがないが、北極がもつ「寒さ」というイメージが、「リビングの外」を歩く自分の姿を想起したときにAさんの思考過程で結び付いたのであろう。実際に体験したわけではないことであっても、思考過程においてイメージとして「共通点」を見出さなければ、このような隠喩が生成されないのである。これは、「寒さ」という共通点でつくられた隠喩表現であったと考える。

Aさんの作品の分析から明らかなことは、レトリックによる表現は、思考力によって支えられていたということである。直喩や隠喩といったレトリックは、「類似性」や「共通性」という拠り所によって言葉と言葉をつなぐ性質をもっているため、思考力のはたらきが不可欠なのである。以上のことから、レトリックの活用を視点につくる単元開発は、子どもの思考力をはぐくむ上で効果があると考えられる。

6 おわりに

本稿では、「思考力」を育む単元の有効性について、レトリックの中から特に、直喩と隠喩に焦点を当てて考察をしてきた。思考力を「対象（自分や他者を含む）との関係をつくっていく力」と規定する立場からは、レトリックの活用に着眼して単元を構想・展開することによって、思考力の育成には一定の成果が期待できる。

今後は、各学年の発達特性の上から、どのようなレトリックが、どのような能力の育成に寄与するのかを授業実践を通して明らかにしていきたい。また、語単位のレトリックだけでなく、文章構成としてのレトリックにも着目してみたい。レトリックを活用した単元開発への期待は大きい。

<引用・参考文献>

- ・佐藤信夫 「レトリックの記号論」, 講談社学術文庫, 1993年, p.55
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領 国語編」, 東洋館出版, 2008年, p.9
- ・佐藤信夫 「レトリック認識」, 講談社学術文庫, 1992年
- ・佐藤信夫 「レトリック感覚」, 講談社学術文庫, 1992年
- ・上越市立大町小学校 「思考力をはぐくむ授業」, 2005年
- ・谷口一美 「認知意味論の新展開」, 研究社, 2003年
- ・谷口一美 「レトリック論を学ぶ人のために」, 2007年
- ・浜本純逸 「月刊国語教育研究4月号」, 東洋館出版, 2012年
- ・松本曜 「認知意味論」, 大修館書店, 2003年
- ・榎山洋介 「認知言語学入門」, 研究社, 2010年
- ・G.レイコフ, M.ジョンソン 「レトリックと人生」, 大修館書店, 1986年